



## 『猿蓑』の連句における大気現象について

田宮兵衛

## 1. はじめに

科学的な気象測器による気候観測が開始される以前の気候の復元に、歴史的な文書等の大気現象に関する記録を用いることがある。歴史的な文書として、特に我国では日記が用いられており、日記に記されている天候記録の集計等各種処理がなされている。

そこでまず問題になることは、日記等歴史的な文書に記されている天候記録の信憑性である。これについては、まず記録を信用し分析を加えた上で、なんらかの基準を設定し、正しさを判断するほかはなかり。近年は複数地点の日記を比較することにより、広域的な気候復元を行う段階に達しており、この方法は同時に記録の信憑性を確かめることにもなる(三七,1983,水越,1989,等)。

次いで関心を持たざるを得ないのは、記録が作成された時代に生きる人々の大気現象に係わる意識である。日記を記す個人が天候を記録するとき、どのような意識であったかを推測することは、日記を詳細に分析することにより、ある程度可能かもしれない。しかし、現在進められている気候の復元においてはこの方向の検討を捨象し、できるだけ単純に天候記録のみを集計することが行われており、先に述べたような展開が示されている。

しかしながら、異なる時代に生活していた人々が大気現象すなわち天候に対して、どのような意識を持っていたかを知ること自体、興味がある問題の設定であろう。これは、単に気候復元ということにとどまることではない。ただし、日記から推測される意識は、個人的なレベルにとどまる。

天候に対する過去の意識を知るための資料には、文学的作品も加え得る。それらは、個人のレベルを超え、一般から認知されたので現在まで残されていると考えられるからである。文学の側からのこの種のアプローチとして、高橋(1978)、日本文学風土学会(1979)等があげられよう。

特に、我国においては、俳句という特異なもの

があり、この問題設定には便利である。俳句には必ず季語を必要とし、大気現象は季節に拘束されているからである。俳句はしかしながらまだ作者個人に依存する程度が高い。

そこで個人の作品ではない連句を考察の対象とすることを考えた。これにより、江戸時代中期(元禄時代)に生きた人々が大気現象に抱く心象を探り、現在との異動を知ること等も可能となる。本論では、その緒として、芭蕉連句のうち猿蓑の4歌仙を対象とする。

まず、連句、歌仙、猿蓑について、本論の展開に関して必要と思われることを、数多くある入門書(東,1978,安東,1981,乾・白石,1980,井本・今泉,1982,尾形,1989,等)を参考に簡単に述べておく。連句の詳細に関して、さらに関心を持たれる方はこれらを参照されたい。

## 2. 連句について

連句は5・7・5音からなる長句と、7・7音からなる短句を、数人の作者が連続的に付けて(作成して)いくものである。付けるに際して、連続性を意味する付合が問題となる。付合については様々な分類が可能のようであるが、今の言葉で言えば、イメージの連関ということになる。連続させる過程で、少なくとも相隣る作者の間には当然共通の理解が必要になり、さらに、連衆(参加者)が形成する座(グループ全体)の共通の理解があるはずである。このことが、本論を可能とする前提である。

連句の最初の句を発句、2番目を脇、3番目を第三、最後の句を挙句という。それ以外は平句である。発句では、必ず季が明かなくてはならない。脇以降は、連句の流れ及び規則にしたがう範囲で、季は無くともよく、その場合雑句という。

また、発句以外の句は直前の句に付けるのであるから、それに対しては付句という。逆にある句の直前の句は前句、さらにその前は打越と呼ぶ。相隣る二句の間に付合による密接な関連がある

が、打越との間には、描写している状況が異ならなければならない、という逆とも言える関係にある。

連句の各々の句における題材、すなわち作者が興味を持った事象、については分類がなされている。このうち、天候に関するものは、聳物（そびえもの：雲等）、降物（ふりもの：雨等）という分類にはいる。

### 3. 歌仙について

連句をいくつ連続させるかということについては、基本は百韻（100句）ということである。ただし、時代的な変遷があり、本論では36句からなる歌仙をとりあげる。歌仙は芭蕉によって確立されたという。この段階では、座の連衆を指導し、吟味、添削する、宗匠という人物が存在するようになる。これを、宗匠が捌くという。宗匠は、事後の推敲をする場合もあるようである。

歌仙は二つ折にした懐紙二枚の表裏すなわち4頁に、6句、12句、12句、6句を記す。各頁をそれぞれ初折の表、裏、名残の表、裏と呼び、その何句目と数える慣習であるが、本論では通し番号を使うこととする。

歌仙を巻く（作成する）については、花の定座（原則として、第17句と第35句、と特定の場所に花を含む句を置く規則）、月の定座、恋の句がはいること、季を連続させる数、等々かなり複雑な式目（規則）があるが本論では、これらの規則については特に立ち入ることはしない。

### 4. 猿蓑について

猿蓑は芭蕉七部集の五番目であり、文学史によればここで「蕉風」が確立されたという。4巻からなる芭蕉一門による発句集と、4歌仙からなる連句集1巻で構成されている。七部集の中から、今回猿蓑をとりあげたのは特に意味はない。しいて求めれば、猿蓑の連句のうち二つは元禄3年、丁度300年前に作られたということくらいである。

巻の五が、歌仙にあてられ、「はつしぐれ」の巻、「夏の月」の巻、「きりぎりす」の巻、「梅若菜」の巻の4つの歌仙がある。最初の3歌仙では、3～4名の小人数で座が構成され、宗匠としての芭蕉による推敲等が十分になされている。

「梅若菜」の巻では芭蕉は中座したということであり、また座が16名からなる等他の3歌仙とはかなり性格が異なる。

### 5. 検討の進め方

はじめに大気現象を含む句を、前句・付句とともに示し、それと前句及び付句との関係を見る。関係とは付合にどの様に係わるかということである。なお、今回は、打越をどう意識しているかについては論じないこととした。

この際、前述の聳物、降物だけにこだわるのではなく、気温の表現等も含め、大気現象に係わり得るものすべてを取り上げる。ただし、季節そのもの（春夏秋冬の4語）は対象としないこととする。

連句とは発句を除き、前句をどう解釈してそれに対してどう考えるかということの繰り返しである。前句との組合せで何等かの心象を表すものである。そこで、付合における大気現象の役割をみようということであるが、あまり単純に済ませるわけにはいかない。各句は連句の基本単位としてある心象を表しており、これをさらに単語に分解することが許されるのかどうか知らないが、あえてそれも行き次のように考えた。

すなわち、大気現象が含まれる句について前句及び付句との関係について、付合の対象か否か、さらに、対象である場合、その現象に対する理解について考察を加えることになる。この他、付合に係わらない大気現象についてもどのように使われているかをみる。

まず大気現象を含んでいる句について、句全体が一つの心象を表し分解不可能であるとしても、大気現象がそこで重要な語である場合（A）とそうでない場合（B）がある。もう一つの可能性として、句の心象がさらに何等かの鍵となる語（キーワード、鍵語）に象徴されることがあり得る。この時、大気現象が鍵語の場合（C）とそうでない場合（D）がある。ただし以上は可能性を述べただけで現実にはAからDの区別はかなり恣意的になる。

大気現象を含む句について、次節以下で行う説明中、『 』で囲んだものは鍵語と考える大気現象（上記C）、「 』は全体の心象の中で重要

な役割を果たしていると考えた大気現象（上記A）を示す。B及びDの場合には括弧を付さない。ただし、このような区別は各句において固定的に認められるということではなく、前句との関係、付句との関係でことなることも当然予想される。もっとも一般的には、前句・付句いずれとの関係においても同じであることが多いので、そうでない場合はその点説明に際して言及する。

この作業によって、大気現象がどのように取り扱われているかを考察する。考察に際しては現在の読者の理解が容易かどうか、次いで理解が困難な場合にはその分析を試みる。

具体的には、各巻ごとに、まず対象とする句を示し、大気現象の扱われ方をみる。通し番号を句の頭に〔 〕で付けたのが大気現象を含む句、（ ）はその前句ないし付句である。各句の後の（ ）は作者を示す。表記は巻の呼び方を含め、中村（1962）にしたがうが、掲載誌の都合上横書きとし、一部新字体（JIS第1・第2水準）を用いる。また重複の省略記号「〜」は「々」に置き換え、中村（1962）が依った原本及び同書で付されたふりがなは省略する。季の区別等も同書にしたがう。

また、説明中で、「ようだ」あるいは「そうである」というように伝聞推定の形で記すものは、出典を一々示さないが、参考文献等の解釈及びそれらで引用されている解釈を踏襲するものである。

## 6. はつしぐれの巻

- [1] 鶯の羽も刷ぬはつしぐれ（去来）  
 [2] 一ふき風の木の葉しづまる（芭蕉）  
 (3) 股引の朝からぬるゝ川こえて（凡兆）

冒頭から2句連続して大気現象が出てくる。発句では『はつしぐれ』が鍵語と考えられる。脇はしぐれにともない短期間強い「風」が吹くものすぐに弱まるという、しぐれの特徴を表すものである。第3句は、しぐれから離れ、脇が表す風景の中においてあり得る人間の動きであるようだ。

- (19) いちどきに二日の物も喰うて置（凡兆）  
 [20] 雪けにさむき嶋の北風（史邦）  
 (21) 火ともしに暮れば登る峯の寺（去来）

第20句には、「雪け」、「さむき」、「北風」が出てきて全体が大気現象と言ってよい。これが前句とどのように関連するか、幸田（1937）等によれば、嶋の漁師が出漁に際し、喰いだめするという解釈である。これに対し安東（1986）は2日目の食べ物と嶋は余計なものとして対応すると解釈する。後者では天候現象は何の役割もなくなる。筆者は、第20句のような状況では厳しい寒さが予想され、それへの万全の準備が必要であり、心理的には2日分の食事もしたくなると、解釈する。これは前者に近い。第21句は前句の状況に人物を登場させれば、燈台に火をともしに行く風景となるらしい。

- (28) おもひ切たる死ぐるひ見よ（史邦）  
 [29] 青天に有明月の朝ぼらけ（去来）  
 [30] 湖水の秋の比良のはつ霜（芭蕉）  
 (31) 紫の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ（史邦）  
 [32] ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ（凡兆）  
 (33) 押合て寝ては又立つかりまくら（芭蕉）  
 [34] たゝらの雲のまだ赤き空（去来）  
 (35) 一構え鞆つくる窓のはな（凡兆）

第29句から断続的に大気現象を含む句が続く。まず「青天」がそれ以下とともに表す風景は清らかな大気の支配下にあり、前句が表す、いきぎよさという心情に対応する。第30句も大気現象を含み、前句の条件下で秋とすれば降霜が予想され、それが「はつ霜」である可能性も高いので理解は容易である。第31句は、その状態にある人が見ている風景が前句という解釈が成り立つようである。第32句の風はこの句全体の中では特に重要な役割を演じているとは思われないが、夕ぐれとともに、ぬのこを着た人物が前句の状況にあることを強調する役割は果している。これを受ける第33句が第32句とともに表す状況においても風の役割は同様に思われる。第34句のたたら雲については、鍛冶屋の煙を雲とみる理解は容易であるが、大気現象そのものではないので第35句とともに参考までに示した。

本巻では、6句で延8つの大気現象、『はつしぐれ』、「風」、「雪け」・「さむき」・「北風」、「青天」、「はつ霜」、風が出てくる。6句のうち長句は2、短句は6である。また、季は第1、2、

20, 32句が冬, 第29, 30句が秋である。連衆は, 去来, 芭蕉, 凡兆, 史邦の4名であるが, 大気現象を含む句は, 去来, 芭蕉が各2句, 凡兆, 史邦が各1句を出している。ここで特記すべきことは, 芭蕉の2句はいずれも前句に大気現象があることである。

## 7. 夏の月の巻

- (1) 市中は物のにほひや夏の月 (凡兆)
- (2) あつし々々と門々の聲 (芭蕉)
- (3) 二番草取りも果さず穂に出て (去来)

協の『あつしあつし』は, 発句の夏の夕刻日中の熱気がまだ残っていて, 何かよくわからない臭いが漂っているよほど暑いという状態を直接言っている。第3句は気温が高ければ稲の成長も良く, 2回日の草取りの前にすでに出穂となるということである。残念ながら, 現在は稲つくりの日程がずれたり, 除草剤を使用したりするため, 当時草取りを何時ごろ行ったか, また出穂の時期が何時であったか不明なので, どのくらいの暑さを考えているのかは分からない。当時の農事暦等を参考にした検討の対象となろう。

- (14) 湯殿は竹の簀子侘しき (芭蕉)
- [15] 茴香の実を吹落とす夕嵐 (去来)
- [16] 僧やゝさむく寺にかへるか (凡兆)
- (17) さる引の猿と世を経る秋の月 (芭蕉)

2句連続して大気現象が出てくる。第15句の「夕嵐」は多少大げさで強さからいえば風で差し支えない風景である。前句の侘しさを表す自然の風景の一つである。第16句は全体として, 茴香の実が風で吹き落とされる情景と呼応した, 秋の寒さのあり様を, 僧が「やゝさむく」寺に帰ることによって示すものである。第17句は, そのような僧と猿と世を経る人物のありようが似ているということのようである。寺に帰る僧が「やゝさむく」と修飾されていることは, さる引との対比をより明確にしている。第14句から第17句は同じ様な調子で, 劇的な展開はない。

- (35) 手のひらに風這はする花のかげ (芭蕉)

- [36] かすみうごかぬ昼のねむたさ (去来)

挙句の「かすみ」はそれ以下とともに前句の風景を再確認している。

本巻では, 4句で4つの大気現象, 『あつしあつし』, 「夕嵐」, 「やゝさむく」, 「かすみ」が出てくる。4句のうち長句は1, 短句は3である。また, 季は第2句が夏, 第15, 16句が秋, 第36句が春である。連衆は, 凡兆, 芭蕉, 去来の3名であるが, 大気現象を含む句は, 去来が2句, 芭蕉, 凡兆が各1句を出している。

## 8. きりぎりすの巻

- (5) 千代経べき物を様々予日して (芭蕉)
- [6] 鶯の音にたびら雪降る (凡兆)
- (7) 乗出して肱に餘る春の駒 (去来)
- [8] 摩耶が高根に雲のかゝれる (野水)
- [9] ゆふめしにかますご喰へば風薫 (凡兆)
- (10) 蛭の口處をかきて気味よき (芭蕉)

大気現象を含む句が断続する。「たびら雪」は鶯とともに春に近ずきやや気温が上がった季節に降るぼたん雪という解釈が成り立つようで, 子日(ねのび)する(初子の日の祝いをすること)と季節的に一致させている。第7句で春と明示しているが, 旧暦の春, 現行暦では2月以降, 太平洋岸で雪の降る確率が高く, 冬が終りつつあって気温が上昇しているのぼたん雪となりやすいことは, 気候学的事実である。第8句には雲が出てくるが, この付合では駒と摩耶が高根が鍵語として対応するとのことで, 雲は高根を修飾するだけである。第8句との関係における第9句の風薫も同様で, 摩耶とかますごが鍵語として対応する所である。ところが, 「風薫」は付句との関係でみれば, それを含めた句全体の雰囲気, すなわち気味のよいことの表現であり, 第10句はそれを別の視点から再度述べたものである。

- (15) 町内の秋も更行明やしき (去来)
- [16] 何を見るにも露ばかり也 (野水)
- (17) 花とちる身は西念が衣着て (芭蕉)

第16句の『露』は前句で秋更けるとしているのが当然の連想である。ここで中村(1962)は、実際の露ではなく、はかなきものへの涙の象徴としているが、現実の露であってもなんら差し支えないと思う。第17句では前句のはかなきものへの涙の象徴としての『露』と、花とちる身が関連するそうである。

(20) 柴さす家のむねをからげる(去来)

[21] 冬空のあれに成たる北風(凡兆)

(22) 旅の馳走に有明しをく(芭蕉)

第21句は「あれ」及び「北風」のいずれも冬の天候そのものであり、前句の状態をもたらす条件である。第22句は、その条件下では、かくあれば良いという思いであるということのようだ。

(31) 物うりの尻聲高く名乗すて(去来)

[32] 雨のやどりの無常迅速(野水)

(33) 昼ねぶる青鷺の身のたふとさよ(芭蕉)

第32句の「雨」やどり中、無常迅速を感じさせるのが前句の物売りが名乗りすてていく声であるのだそう。空間的、時間的な変動が大きい雨という現象を無常迅速と感じているとしなければ、この解釈は成立しない。第33句は、無常迅速の世への対応のあり方として昼寝てすごす鷺を尊いと思うことだそうである。しかし「雨」は、それから水辺の鳥である鷺への連想もあり得ると考えれば、付句との関係においても一定の役割を果たしている。

本巻では、6句で7つの大気現象、「たびら雪」、雲、「風薫」、『露』、「あれ」・「北風」、「雨」が出てくる。6句のうち長句は2、短句は4である。また、季は第6句が春、第9句が夏、第16句が秋、第21句が冬、第8句と第32句は雑である。連衆は、凡兆、芭蕉、野水、去来の4名であるが、大気現象を含む句は、凡兆、野水が3句ずつ出し、芭蕉、去来は出してない。一人あたり9句のうち3句は多いと言えるのではないだろうか。

## 9. 梅若菜の巻

(7) 放やるうづらの跡は見えもせず(素男)

[8] 稲の葉延の力なきかぜ(珍磧)

(9) ほつしんの初にこゆる鈴鹿山(芭蕉)

第8句の「かぜ」は延びた稲の葉をわずかに揺るがせているのであるが、ほとんど動きがないことが前句の状態と呼応するのであろう。第9句との関連は、西行の歌によるべきであるという説もあるが、風は直接関わってはいないようである。

(33) 形なき絵を習ひたる会津盆(嵐蘭)

[34] うす雪かゝる竹の割下駄(史邦)

(35) 花に又ことしのつれも定らず(野水)

[36] 雛の袂を染るはるかぜ(羽紅)

第34句は、「うす雪」が竹下駄にかかってできる模様が前句の形なき絵からの連想であると思う。第35句は下駄に雪がかかったまま放置されているような状態では、冬が明けてすぐ予定している旅の同行者もまだ決まっていない、というように解釈するらしい。挙句の「はるかぜ」は花の咲いてる時期の旅ならば当然春風も吹いているであろうという、当り前の連想であるとのことである。

本巻では、3句で3つの大気現象、「かぜ」、「うす雪」、「はるかぜ」が出てくる。3句はいずれも短句である。また、季は第8句が夏、第34句が冬、第36句が春である。連衆は先述の通り16名であるが、大気現象を含む句は、珍磧、史邦、羽紅が出したものである。

## 10. 使われた大気現象に関する集計

以上、4巻の連句で大気現象がどのように使われているかをみてきた。当初大気現象について、現在とは異なる理解をする必要がある事例が見いだされれば、面白いことになるかと期待していたが、残念ながらそれはなかった。筆者の連句及びその背景に関する知識水準で、理解が困難であった付合は、関連する事象が現在では極めて少なくなったか、無くなったことによる場合が大部分であった。はつしぐれの巻の第19句の、「二日の物も喰う」ことと第20句「雪けにさむき嶋の北風」の付合はやや理解が困難であるが、これは昔からのことのようにである(安東, 1986)。

第1表 大気現象を含む句の季の数(巻別)

	春	夏	秋	冬	雑	計
はつしぐれ	0	0	2	4	0	6
夏の月	1	1	2	0	0	4
きりぎりす	1	1	1	1	2	6
梅若菜	1	1	0	1	0	3
計	3	3	5	6	2	19

第2表 巻別の季の数

	春	夏	秋	冬	雑
はつしぐれ	5	2	6	4	19
夏の月	5	3	6	1	21
きりぎりす	8	4	9	1	14
梅若菜	8	5	5	2	16
計	26	14	26	8	70

第3表 大気現象の種類別の季の数

	春	夏	秋	冬	雑	計
降水	1	0	2	3	2	8
風	1	2	1	4	0	8
天候	1	0	1	1	0	3
気温	0	1	1	1	0	3
計	3	3	5	9	2	22

ここでは、機械的になるが猿蓑の4歌仙中に出てきた大気現象について集計する。144句のうち19句に延22種の現象が取り上げられている。すなわち、雨等降水に関するもの8〔はつしぐれ、雪け、はつ霜、たびら雪、露、雨、雲、うす雪〕。風に関するもの8〔北風、夕嵐、風薫、北風、はるかぜ、及び単に風ないしかぜ、3〕。天候を表すもの3〔青天、かすみ、あれ〕。気温表現3〔さむき、あつしあつし、やゝさむく〕。

第1表に、大気現象を含む句の季の数を巻別及び合計で示すが、第2表に示した各巻別の季の数と比較すると、冬は季に係わって大気現象が出てくる比率が高い。第3表は、大気現象の種類別にそれを含む句の季の数を示す。複数の現象が出てくる句が2句あるがいずれも冬であるため、冬が多くなっている。また、春の3句のうち2句は挙句である。挙句が花の定座の付句である場合、季は春を続ける慣習となっている。残る1句も出てくる大気現象はたびら雪とほとんど冬に近い。これらを考慮すると、大気現象を含む句が春であることは少ないといえよう。

猿蓑の連句全体を通しての、作者別大気現象を含む句の数は、凡兆5、去来4、芭蕉3、野水3、史邦2、珍磧1、羽紅1である。4歌仙を通しての作者別総句数は、凡兆32、去来32、芭蕉33、野水10、史邦10、珍磧3、羽紅1である。梅若菜の巻を除くと、凡兆、去来、芭蕉各々30の総句数に対し上記と同じ句数、史邦は9に対し1であり、これら作者の大気現象への関心については特に大きな違いは認められない。ただし野水は猿蓑の連句では、きりぎりすの巻だけに登場し総句数9に対し3なのでやや多いが、他の歌仙についても調べてみなければ大気現象への関心について論ぜられない。

ただし、長句と短句の数についてみると、19句のうち前者が5、後者が14と有意と思われる差がある。これについては今のところ説明できない。

## 11. 他の事例

以上、猿蓑の4歌仙について大気現象の取り扱い方をみてきたが、ここで他の事象について同様のことが可能か予備的に調べてみた。対象として「土」を取り上げることとした。その理由の一つは下記の通り4歌仙中2句と数が少ないことがある。ここでみる限りでは、大気現象の場合と同様、現在でも理解は容易である。

### 夏の月の巻

(19) 五六本生木つけたる瀧(凡兆)

[20] 足袋ふみよごす黒ぼこの道(芭蕉)

(21) 追たてゝ早起御馬の刀持(去来)

第20句の『黒ぼこ』は黒ぼくともいい、火山灰から生成した黒色の日本の代表的な土壌である。前句の瀧（みずたまり）は足を汚し、黒ぼくで足が汚れるという連想であろう。第20句は馬及び刀持が走れば道の土ほこりも立とうというものである。

#### 梅若菜の巻

- (2) かさあたらしき春の曙（乙菟）  
 [3] 雲雀なく小田に土持比なれや（珍磧）  
 (4) しとき祝ふて下されにけり（素男）

第3句の「土持」つ頃は、前句の春の風景である。第4句は、そのようなことは喜ばしく、祝うべきことということのようである。

#### 12. おわりに

ここで試みたような連句の読み方をして良いのかどうか全くわからない。専門家からみればとんでもない読み方といわれるかも知れない。しかしながら、素人がこうすることによって連句の理解が深まったことは事実である。

井本（1986）によれば、芭蕉の連句は、歌仙より長いものも含め約380あるそうである。また、七部集には38の歌仙があるが、そのうち芭蕉が参加しているのは17である。これらから始めていずれば、芭蕉の全歌仙について本論と同様の検討を行いたい。これによって、10節で示したような特徴が一般的に成り立つのかどうか調べ、当時の人々が大気現象にどういう意識を持っていたか、もうすこし探ることを考えている。

後期中等教育で教わった芭蕉の付合について、自分の専門と結び付けることによって理解を試みることは長年の願望であった。それを実行しても、少なくとも表面的には必ずしも無理ではない機関に所属できるに際し、御尽力賜った浅海重夫先生の退官に当たって、本文を捧げることをお許し願えれば幸いである。

#### 文 献

- 東 明雅（1978）：『連句入門 芭蕉の俳諧に即して』。中央公論社，221ページ  
 安東次男（1981）：『連句入門 蕉風俳諧の構造』。筑摩書房，306ページ  
 安東次男（1986）：『風狂始末 芭蕉連句新釈』。筑摩書房，287ページ  
 安東次男（1989）：『続風狂始末 芭蕉連句新釈』。筑摩書房，314ページ  
 乾 裕幸・白石梯三（1980）：『連句への招待』。有斐閣，259ページ  
 井本農一（1986）：『連句の変化の考察』。国文学，31-4，6-11  
 井本農一・今泉準一（1982）：『連句読本』。大修館書店，286ページ  
 穎原退蔵（1955）：『芭蕉讀本』。角川書店，328ページ  
 尾形 仵（1989）：『歌仙の世界 ——芭蕉連句の鑑賞と考察——』。講談社，295ページ  
 幸田露半（1937）：『評釈猿蓑』。岩波書店，278ページ  
 高橋和夫（1978）：『日本文学と気象』。中央公論社，240ページ  
 中村俊定（1962）：『芭蕉句集，連句編』。岩波書店，538ページ  
 中村俊定（校注）（1966）：『芭蕉七部集』。岩波書店，446ページ  
 中村俊定（1985）：『芭蕉の連句を読む』。岩波書店，271ページ  
 日本文学風土学会（編）（1979）：『雪と文学』。教育出版センター，233ページ  
 三上岳彦（1983）：1970年代の天候分布。気象研究ノート，147，91-97。  
 水越允治（1989）：中部・近畿地方における古記録による歴史時代の気候復元。昭和62-63年度科学研究費補助金（一般研究〔C〕）研究成果報告書，93ページ

Weather in "Renku" of "Sarumino"  
 Hyoe TAMIYA